中世前期における騎士の戦術と武装

堀内一徳

はじめに

マルク・ブロックによると、西欧ではカロリング時代以降、甲冑、槍、楯、剣で武装し騎馬で戦うエリートの戦士が存在し、十世紀頃に鎧が使用されると、長い槍がそれまでの短い槍に代り、また鼻当のちに面頬が加わり、さらに鎖帷子は皮か織物の綴合せの上に鉄の環や板を縫い合せて精巧となるが、このような武装は高価であり、富裕な人々のみが購うことができた。十二世紀には、騎士階級はその伝統をもたない家門の子弟を次第に排除し、以後社会の下層の者に対して門戸を閉し、十三世紀中頃から貴族身分を形成していったという。[1] 今日、騎士の起源が八世紀に遡るとか、また騎士が中世の貴族の起源であるという説は、大方のコンセンサスを得られない。しかしカロリング時代から十二世紀にかけての西欧の軍事技術の著しい進歩が、騎士階級ないしは身分の形成を促したことは間違いない。

以下においてカロリング時代から一〇六六年のヘースティングズの戦までの期間に騎士が参加した主要な戦いにおけるかれらの戦術および武装について述べてみたい。

(一)

周知のように、H・ブルンナーは、一八八七年の論文「騎士の勤務と封建制の起源」において、フランク・メロヴィング王朝の宮宰カール・マルテルが七三二年のポワティエの戦でイスラム軍を破ってのち、騎馬兵の増強によって急速な軍事力の強化をはかり、そのため教会財産を没収し、家臣にプレカリアとして譲渡したと説き、こうした戦術の改革をもって封建制度の基礎の確立と結びつけ、八九一年東フランク王アルヌルフがノルマン人をルーヴァン近くで

破ったディーレ（Dyle）川の戦いまでに、騎士がフランクの軍隊の中軸となったという。[2] ブルンナーのメロヴィング末期の戦術改革説は、多くの論議をよび、たとえば、H・フォン・マンゴルトーガウドリッツ（Hans von Magnold-Gaudlitz）は、フランク人は領土拡大にともないより多くの馬の飼育が可能となり、西ゴート、アヴァール、ランゴバルトなどの騎馬兵と戦わねばならなかった状況とあいまって、五〇〇年から九〇〇年の間に漸進的に騎士が発達していったといい、[3] F・ロト（F. Lot）も、ガリアにおいて、騎士は中世西欧の歴史的変化の性格である漸進的な発達をとげたと理解している。[4] しかし、一九六〇年代になって、L・ホワイト（L. White）は、ブルンナー説に新たな解釈を加え、その説の新たな擁護者となった。ホワイトによれば、マルテルとその息子ピピン（三世）、カールマンは、フランクの軍隊に騎馬兵の増加をはかり、ベネフィキウムのシステムに適合した王国に組織化するように導いたが、これはイスラムとメロヴィング朝との戦いによって喚起されたものではない。ポワティエの戦いでイスラム軍の主力は歩兵であったし、イスラムとの戦いは、メロヴィング朝の軍事戦略の課題の中でわずかな比重しか占めておらず、また教会財産の没収にしても、ポワティエの戦い以前にすでに実行されている。[5] したがって、八世紀前半にフランク王国で騎馬兵の増強が推進されたとすれば、それは鎧の使用が急速にフランク王国に普及したからにほかならず、この鎧の使用は歩兵から騎馬兵へのドラスティックな戦術の転換を促し、その軍事的発展は社会・経済的な結果としての封建制のほとんど爆発的な発展へ導いたと説明している。[6]

以上のようなホワイト説に対して、E・バクラク（E. Bachrach）は、次のような批判を加えている。[7] まずかれは、ホワイトがブルンナーを踏襲し論拠としている事実を否定している。ひとつは、七五八年にピピンがザクセン人の貢納の牛五〇〇頭を馬に変更しているが、すでに七三二年以降に戦術の改革が進展しているならば、なぜ七四八年にピピンは貢納を牛で受領しているのかという点である。もうひとつは、七五五年にフランクの伝統的行事であった有力者と軍隊の毎年の召集を三月から五月に移したのは、馬の頭数が増加したため三月では飼い葉の供給が間に合わないからであろうとする点で、バクラクは、ランスのヒンクマール（Hincmar）の記述にもとづいて、この召集は、年間のある時期に行われた通常の軍隊の召集であると判断

している。またホワイトは、ディーレ川の戦いでフランク人は徒兵で戦うのに馴れていなかったという「フルダ年代記」の記述をフランクにおける騎士の発達の根拠と解しているのに対して、バクラクは、ノルマン人を湿地に追跡したアルヌルフの騎士たちが馬から降りて一歩一歩ノルマン人に接近する戦術をとったものと、この記述を解釈している。[8] そして、バクラクは、ホワイト説の核心である鐙の問題について、ホワイトが論証とする乗馬、下馬を表わす言語表現の変化や図像に表現されている騎士像に対して、以下のような反論を展開している。ホワイトが馬に跳び上る（insilire）馬から跳び降りる（desilire）という動詞に代って馬に登る（scandere）馬から降りる（decendere）が使われ始めたというが、これらの用語の出典であるヘルモルドゥス・ニゲルス（Hermoldus Nigellus）の詩、「フルダ年代記」およびゲルマンの古い伝説のラテン語による翻案「ワルタリウス」（Wartarius）は、いずれも九世紀後半の史料に属し、これが八世紀の状況の証としては信用しがたいし、「ワルタリウス」の作者はdesilireとdecendereとを混用しており、すでにトゥールのグレゴリウスは、馬の乗り降りにaccendereとdecendereの語を使っている。[9]

こうした点からみても、マルテルの時代に鐙の重要性が認識されていたとは考えがたい。またカロリング時代の図像に表現されている鐙の例証として、ホワイトは、ザンクト・ガレン修道院の「黄金詩篇」の細密画と「ユトレヒトの典礼用詩篇」（八三〇年）の図像をとりあげているが、バクラクは、前者には鐙を備えた騎士と欠いた騎士の像があるし、後には鐙を使用している騎士は描かれていないという。

ついで、バクラクは、ホワイトの鐙の早期の使用と普及の説論に対して、次のような論拠によって反駁している。たとえば、「リプアリア法典」の最初の改訂版の武器のリストの中に剣の鞘、脛当、騎馬、胸当（brunia）兜（helm）や槍、楯などが含まれているが、鐙については記されていない。[10] また、ノトケルス（Notocerus）の「カール大帝伝」は、新たに着任した司教の従者が馬に乗るために踏み台を用意したが、司教は従来通り馬に跳び乗ったことや、武装したカール大帝の像や騎士について語っているが、鐙についての記述を欠いており、ただ騎士が乗馬しやすくするため甲冑を帯びないと記している。[11] 「ワルタリウス」には馬の蹄鉄について記されているが、鐙についてはなんら触れられていないし、[12] 九世紀中頃のラバヌス・マウルス（Rabanus

Maurus）は四世紀ローマの軍事学者ウェゲティウス（Vegetius）の「軍事書」の要約をロタール一世に献じているが、そのなかで馬の乗り方の訓練のために木馬の利用について加筆しているが、鎧についても騎乗による槍の刺突についてもなんら筆が加えられていない。[13] したがって、もし、鎧や騎士の刺突戦がカロリング時代にとって重大な関心事であれば、軍事訓練や作戦に関する著作に鎧や騎馬戦術が省略されているのは不自然であるという。さらにバックラックは、F・シュタインの「八世紀ドイツの貴族の墳墓」の考古学調査のデータ[14]を分析して、東フランキアにおいて、七世紀後半から九世紀はじめの間に埋葬された戦士七〇四人のうち、鎧を使用していたと判断できる十三人から、疑問の残る九人を除いた一パーセント以下の騎士が鎧を用いていたと推定している。[15] このように、鎧が拍車と同様にその所有者の副葬品として埋葬されていないのは、鎧が高価で、稀少であったことを示し、カロリング時代において、鎧はごく少数の騎士にしか利用されていなかったことを語っているであろう。

ところで、メロヴィング時代およびカロリング帝国における騎馬兵の軍事力に対する評価は一定しないが、バクラックによると・メロヴィング時代の騎馬隊は比較的に多いと思われるが、騎馬兵はかならずしも馬上で戦ったのではなく、状況によって馬から降りて歩兵として戦ったという。そして、メロヴィングの軍隊はフランク人ほかローマ人や他のゲルマン人から構成され、フランク人は少数であり、フランクの騎馬兵はわずかな部分を占めたにすぎないという。[16] W・ヤンセン（W. Janssen）は、考古学の研究調査の結果から、メロヴィング時代の騎馬兵について、次のような見解を示している。

中世初期の行列塚式墳墓の分布するテューリンゲン、ザクセン、フリースランド、アレマン、バイエルンなどの地方において馬が随葬されている墳墓が発見されているが、ザクセン、テューリンゲン、低地地方の行列塚式墳墓では、一つの墓地に多数の馬が随葬され、ザクセンのベッヘム（Bechem）IIの貴族の墓地では、墳墓のまわりに半円を描くように馬が葬られている。これらの墳墓に随葬された馬はほとんどが雄馬であり、馬骨はしばしば頭蓋骨を欠いたり、下顎のみを遺すものがあるが、馬銜や馬勒などの金具や鎧、鞍、鐘状の帽子、半球状の剣の鞘などが副葬されている。このような点から、馬は王侯、貴族等の社会的上

層の戦士の墳墓に随葬され、随葬された馬はかれらのステータスを示している。このような考古学の成果から導き出された結果から、ゲルマン人は通常歩兵として軍隊に参加しているのであり、メロヴィング時代において、大規模な騎馬軍が構成されたと想定することはできないであろう。しかし、カロリング時代、とくにカール大帝の時代に騎馬兵に対する関心が高まり、それが強く推進されたことは否定できないし、またそれは、カロリングの騎士より装備の整ったアヴァー人の騎士との戦いの成果であったろう、と示唆している[17]。

では、カロリング帝国における騎士がどのような軍事力を担っていたのか。F・L・ガンスホーフ（F.L.Ganshof）は、甲冑を装備した騎士の数は少いが、しかし戦術的にもおそらく作戦上でも極めて重要な役割を演じ、かれらはザクセン、アヴァール、スラブ、おそらくデーン人に対してカロリングの軍事力の優位を保証しえたという[18]。また、J・E・フェルブルヘン（J.E.Verbruggen）によると、カールの軍隊の中核は重装騎士で、その一個の大部隊は二五〇〇から三〇〇〇の騎士と六〇〇〇から一万の歩兵を擁し、騎士の中の五分の一ないしは四分の一が重装騎士で、大部分は軽装の騎士であると想定している[19]。あるいは、K・F・ヴェルナー（K.F.Werner）によると、八〇〇年から八四〇年において、軽装騎士を除いて、カロリング帝国は三六、〇〇〇の騎士を擁したと推定し、これらの騎士は帝国のさまざまな地方から召集され、その大部分は伯管区やベネフキウムを授受したウァサルによって供給されたとしている[20]。P・コンタミヌ（P.Comtamine）は、ブルンナー説の破棄を暗示し、騎士はカールの軍隊のもっとも強固で有効な部分を構成したという[21]。そして、バクラクはカール大帝の軍隊を構成した騎士を二つのタイプに分類し、ひとつは楯、槍、長剣、短剣および弓矢を備え、しばしばカバラリイ（Caballatii）とよばれる騎士と、以上の武装のほかに鎖のついた着衣（鎖帷子）、兜、おそらくは脛当を着用した騎士とに分けている[22]。

ここで、なおメロヴィング時代からカロリング時代の武器についてふれておこう。サリカ法典やリプアリア法典などの部族法典にあらわれる武器は、二つのグループに分けられる。ひとつは、早期か標準的な武器として楯（scutum）と槍（lancea）、またランゴバルト族の場合には弓矢が加わるが、これらは費用のかからないゲルマン人の伝統的武

器である。もうひとつは、限られた戦士が具えた剣および防具としての甲冑で、後者は社会階層のランクの表示でもあった。カール大帝の時代に騎士は歩兵と異なる剣を帯びていたか、両者とも長槍を擁していない。カロリング時代までに普及した武器のひとつは、材質の点からも生産技術の点からも費用のかからない短剣で武器および日常の用具としても使用された。

サリカ、アラマン法典に記されている弓矢は狩猟の目的で使われたと解されるが、御料令の第六十四条には武器として表現されている。しかし、メロヴィング、カロリングの軍隊の射手の戦闘における成果はほとんど知られていない。弓はアラブ、アヴァール人、ランゴバルトなどとの戦いに限って使用されたのかもしれない。[23]

バクラクは、騎士を維持し、それを改良するカロリング国家の努力を否定しないが、騎士は十分に訓練を積んでいない敵の小グループに対する探索や破壊活動や包囲戦における支援や守備隊の成員としての巡視の任務を主要な役割とし、騎士が大きな戦闘に登場する場合には、下馬して歩兵として戦ったとして、当時の騎士の軍事力の限界を示している。[24]

ところで、カロリング帝国における騎士の軍事力の強化とともに、軍用馬に対する需要が高まったことは、七八一年のマントゥア（Mantua）の勅令の第七条で、種馬（amissarius）が奴隷や武器とともに輸出禁止の項目に数えられているし、[25] カールが馬の飼育について配慮を示していることは、御料地令の第十三、十四条からうかがうことができる。すなわち、種馬によく注意を払い、損われないように、長く同じ牧場にとどまらせることは許されない。もし種馬のどれかが健康不良か、老齢のため死にかかっているならば、雌馬の中に送る季節がくる前に、われわれに報告すべしこと（第十三条）。また、雌馬をよく管理し、かつ雄の仔馬を適当な時期に引離すべし、もし若い雌馬が増殖したときは、これを分離して新しい群に取りまとめること（第十四条）。を荘司に命じている。[26] あるいは、ノルマン人の侵攻に脅かされた西フランクのシャルル二世（禿頭）によって発せられた八六四年のピートル（Pîtres）の勅令の第二十五条には、ノルマン人に対する身代金か別の理由で、武器や馬を提供する者は、国家に対する反逆者として死刑の執行猶予ないしは救済の機会を与られないとあり、[27] ここに馬の軍事的価値がはっきり認識されている。

R. H. C. デーヴィス（R. H. C. Davis）は、紀元前五世紀までに地中海沿岸地方に伝播した馬の計画的飼育法が西ローマ帝国の崩壊とゲルマン人の移動などの混乱の中で失われた過程を次のように説明している。紀元前一〇〇〇年紀に中央アジアのアルタイ山地で乗用馬の飼育が始まり、それが東は中国、西はバクトリア地方に伝わり、西アジアでの戦車戦から騎馬戦への転換を可能にした。紀元前七世紀にギリシア人がリビアの地中海沿岸でキレーネ産の乗用馬を獲得してのち、飼育馬の主な品種が東地中海沿岸地方に拡大した。ローマ時代には戦車競争や騎馬兵用の馬の飼育が大規模に組織化され、カッパドキアのテュアナ（Tyana）近くのウィラ・パルテマティ（Villa Parmatii）、スペイン、シチリヤ島、アプーリアのカースト地帯、カラーブリア、イストリアおよび北アフリカなどが種馬の飼育地として知られ、馬の飼育地はローマ帝国時代に地中海沿岸の諸地域に及んだ。良馬を飼育するには、良い雌馬を確保し、馬小屋ないしは種馬を識別する柵で囲まれた飼育場のように、雄馬から隔離する十分な施設が必要であるが、ゲルマン人の侵入の混乱によって、西ローマ帝国では、こうした馬の飼育の管理は不可能となったと思われる。この結果、良質の馬の頭数が急速に減少し、そのため十分な騎馬を求めるのが困難となった。[28]

このデーヴィスの説を裏書きするように、民族移動期から、メロヴィング時代に墳墓に随葬された馬の骨の分析調査によると、良馬が埋葬されているケースは少く、馬は関節の病気にかかったり、過酷なあつかいや過重な負担による骨の変形の跡がみられるという。[29] これに対して、北アフリカを占領しスペインに侵入したアラビア人はローマ時代に良馬の飼育地として知られた北アフリカにおいて騎馬の調達が可能であったし、スペインの征服におけるイスラムの騎馬兵はアラブ人でなくベルベル人であり、その馬は北アフリカ産であったであろう。デーヴィスは、ポワティエの戦でアラブ人は騎馬で戦ったのであり、この戦いでフランク人は始めてアラブ人の騎馬を発見したのであろうから、おそらく、ブルンナーのマルテルによる戦術改革説は正しいであろうと解釈している。[30]

なお、教皇ヨハネス八世がガリシアの王にスペインでalfaracesとよばれるイスラムの良馬を要求し、カール大帝がペルシア王にスペインの馬を贈与したというのは、[31] アラブの馬が大型の良馬であったことを物語るものであろう。

(二)

それでは、カール大帝の時代からヘースティングズの戦に至る間に、騎士が登場した戦いで、かれらはどのような戦術によって戦いを展開してのか、主な戦をとりあげ、時代を追って述べてみたい。

カール大帝のザクセン戦争において、七八二年のウェーザー河畔のジュンテル（Süntel）山の戦いで、フランクの騎士はザクセン人を正面攻撃するのを避けて、戦利品を獲得するかのように戦闘配置にいていたザクセン人の背後に回わったが、戦闘が始まると、フランクの騎士はザクセン人に包囲されて、ほとんど殺されてしまった。[33] バックラックは、中世前期の戦闘や合戦における騎士の戦力にはおのずから制約があるという例証として、このジュンテル山の戦をあげているが、[33] デーヴィスは、フランク人は騎乗で戦ったのではなく、フランクの主力部隊の到着前に、勝利を焦って、まったく無秩序に騎士たちが発進してしまった結果であり、味方との連係を無視した攻撃はなんの効果もないと解釈している。[34] ザクセン戦争とともにカールの治世の大規模な戦争であったアバール人との戦では、数千のフランクの騎士が投入されている。一方、トルコ系の遊牧民族であるアヴァール人の軍隊の中核は、重装騎士であり、かれらは鉄製薄板のヘルメットと甲冑を着用し、馬も胸当などの防具で保護され、三メートルにも及ぶ長槍や敵の甲冑を打ち砕く槍、剣および長剣（サーベル）や弓を装備し、さらに、これらの武器の一、二のみを備えた騎士が加わり、戦局に対応して槍と弓を使い分け、木片や獣骨を重ね合わせて強化した反射弓から放たれた矢の射程距離は五〇〇メートルに達し、かれらは馬上で弓を巧に操り、ギャロップで前後の方向に一分間に二千本の矢を射ったという。[35] またビザンツ皇帝マウリキウス・ティベリウス（Mauricius Tiberius）の作と偽称されている「戦術書」（Strategikon）には、アヴァール人の重装騎士をモデルにして、ビザンツの騎馬兵を再組織するための方策を示し、鎧の使用を教えている。[36] しかし、フランクの史料からは、アヴァール戦争において、アヴァールの騎士がどのように戦ったかは明かにされていないが、フランクの主要戦力としてアヴァールの砦を破壊し、勝利を収めたのは騎士ではなく歩兵であった。他方、アヴァールは、フランク軍の進撃に対して、砦の背後に後退してしまっているのは、遊牧騎馬民族にとっては異例のように理解されるが、これは、すでにかれらが

遊牧生活から離脱し定住生活に慣れていた結果、このような戦術に転換したことを語っているのであろう。[37] また、アヴァールの戦力の主体は歩兵であり、たとえば、六二六年のコンスタンティープル攻撃に関して、史料はかれらの歩兵のみしか語っていない。[38] なお、六二六年から八〇〇年の間の、すなわち七世紀後半のフランクによるアヴァール征服戦争の時代を含む期間における、チェコスロバキア東部のブラティスラバ（Bratislava）近くのテーベンノイドルフ（Thebeneudorf）のアバール人の集落の発掘調査によると、約千人のアヴァール人の墳墓のうち、一〇パーセントが騎士の墓で、副葬品から判断して、騎士のうち一五パーセントが富裕で、八〇パーセントが比較的富かであるが、二五人が下層民に属している。またこの集落のアヴァール人の大多数は自由人で、農業や手工業を営み、一部は武器を帯びていたという。[39] これは実戦ではないが、八四二にルートヴィヒ・ドイツ人王とシャルル二世がヴォルムス近くで催した模擬戦は、当時の騎馬戦の実態を映し出していると思われる。ザクセン人、アウストラシア人（ライン・フランク人）、ガスコーニュ人、ブリトン人が同数づつ二手に分れ、それぞれの集団が相手を攻撃するかのように突進し、やがて一方の側は反転し楯に身を隠しながら逃がれる振りをして後退するが、すぐにとって返し、立場を替えて、追跡したものを追う役に回った。そして、最後には、人々が歓声をあげ、槍を振り回す中を、二人の王が馬に乗って現われ、まず一方の逃亡者に、つぎに他方の逃亡者に、襲いかかった。[40] この記述の中にはじめて騎士の長槍（騎士槍）が記されている。[41]

ところで、シャルル二世が甥ルートヴィヒ三世からロートリンゲン東部の獲得を策して開かれたアンデルナハ（Andernach）の戦いで、シャルルの騎士部隊の進撃を迎えたルートヴィヒはシャルルの騎士隊の側面にかれの騎士を配置する方法によって、側面攻撃が功を奏し、シャルルは騎士を失い、武具類を奪われるなどの高価な犠牲を払ったが、東フランク人の善戦によって勝利を収めている。アンデルナハの戦いにおけるシャルルの側の騎士に対する側面攻撃は、また九八二年オットー二世の軍隊がカラーブリアのコトローネ（Cotorone）で敗れた戦いにおいても奏功し、アブル・カシム（Abul Kasim）の軽装騎士が偽装の退却ののち、隠されていた騎士による側面攻撃によってオットー二世の騎士を破っている。[42] このような、前衛の騎

士の偽装の退却ののち、ひそかに待期していた騎士による敵の騎士部隊の側面を攻撃する戦法は、九三三年のリアデ（Riade）の戦いにおいてドイツ国王ハインリヒ一世（捕鳥王）によっても実行されている。すなわち、テューリンゲンの騎士にみせかけの後退をさせ、ハンガリーの軽装の騎乗の射手をザクセンの重装騎士を配備した地点までおびき寄せ、ザクセン騎士の密集部隊が攻撃し、ハンガリーの騎士は敗走した。[43] また、九五五年のレヒ（Lech）川の戦いで、ハンガリー軍はオットー一世によって再び敗北を喫しているが、この戦いで、オットーの全軍と対決したハンガリー軍は余りに少数で、オットーの騎士と歩兵による攻撃に耐えられず、逃亡してしまったが、オットーの軍隊の圧倒的多数を占めたのは歩兵で、騎士部隊はフランコニアとザクセンの二個部隊にすぎなかった。そして、逃亡したハンガリー軍を追討したのは、これらの騎士であった。[44] 騎士部隊は、退却した敵の追討、あるいは、すでに敗北した敵が休息したり、再結集するのを防ぐため、敗走する敵を追跡する役割を担っていた。これはヘースティングズの戦いののちに、ウィリアム一世の騎士によって行われたところである。なお、アヴァールと同様に遊牧騎馬民族であったハンガリー人の軍隊がリアデの戦いにおいて、ハインリヒ一世麾下の重装騎士に対して、逃亡、後退しているのは、ハンガリー軍がすでに基地（砦）へ定住的駐屯する戦士へ変化したことを示すものであり、レヒ川の戦いにおいても、逃亡したハンガリー軍が疲労した馬を休息させるために休止していたため、ハンガリーの騎士は再び乗馬できずに多数が殺されている。こうした事情は、内陸アジアのステップ地帯と気候、地形などの自然環境が鋭く異るカルパティア山脈の西の地域において、遊牧騎馬民族がどの程度の家畜群を保有し続けられるかに深くかかわっていることを示していよう。[45]

(三)

以上で中世前期の戦争に登場した騎士の主な戦術をとりあげたが、次に騎士の戦闘技術と武器について述べておこう。

すでに述べたところから明かであるが、鎧の使用がかならずしも騎馬戦術に重大なインパクトを与えるものではなかった。しかし、鎧の使用により、馬上の騎士の座は安定し、騎士の主要な武器である槍による攻撃ははるかに効果を増し、槍を小脇にかかえ込んで敵を刺突することも可能

にした。

鐙は七〇〇年頃に導入され、八・九世紀の間にその使用が普及した。それは十世紀の図像（マカーベ書）に現われており、[46] 馬上の騎士が槍を振り上げ、上手からの槍の投擲を可能にし、十一世紀までに騎士はまっ直に伸ばした両脚で鐙に立ち、上体を前方の馬の方向に倒し、長槍を上手から投擲する構えをみせている。十一世紀の後半になると、騎士は立位の姿勢で、槍を刺突したり、投擲するのが一般化し、さらに、槍を右腕に抱き込んで低い姿勢で敵を刺突する方法へと発展している。

バイユーのタペストリーは、ノルマンの騎士が鐙に脚を置いて立ち、低姿勢でハロッドの戦士に対して、長い柄のついた武具を握っている図柄が描かれているが、[47] このような騎士の槍の操作は、鐙の使用と鞍の発達によってはじめて可能となった。十二世紀には、重厚な高い前輪や後輪が発達し、前輪は騎士の下半身を保護するのみか、騎士が後輪の方向に追いやられた衝撃の反動で、前方に投げ出されるを防止しうるし、後輪は後方からの槍の刺突に対して騎士を守るようにし考案された。騎士は高い後輪に背をもたせかけて鞍にまたがり、鐙に置いた脚を前方に投げ出すような形をとり、上体は鞍にとじ込められた恰好となり、騎士の戦闘技術は最終段階に到達する。[48] しかし、軍事力として騎士に高い価値を付与したのは、鐙や鞍ばかりではなく、かれらの武装であった。

フランク人の歩兵の標準的武装は楯と槍であり、兜、胸当は王侯や貴族に限られていた。カロリング時代の軍事改革の方向は、兵力の増強に対応する武器の増産を推進したものであり、カール大帝の軍隊は、歩兵であれ、騎士であれ、その武装は充実し、槍と楯から兜、胸当、長剣、短剣へと武装が強化されていったが、これは主として経済的発展と手工業生産の進歩の結果であり、整備された武装によって、騎士は特別な軍事的価値を与えられるようになった。

中世前期には、馬の購入や飼育は大きな負担であった。しかし、バイユーのタペストリーに描写されている馬は大型の馬でなく、考古学の調査によれば、大型のポニーに類似すると判断されている。[49] これらの馬の飼育には熟練の労働を必要としなかったし、オート麦ないし干し草を大量に消費しないので、多くは各地の森林で飼育されていたであろう。ポンティウのギョームがスペイン王からウィリアム一世にオーヴェルニュやガスコーニュの馬が贈られたと語っ

ているが、ヘースティングズの戦いにおけるスペイン産の馬の数頭を過大に評価することはできない。[50] こうした馬の飼育に対して、騎士が帯びる武器は製作に練達した鍛冶屋が必要であり、生産地から買入れ、貨幣で支払わねばならなかった。タペストリーの図像には、防具として兜、鎖帷子とともに表現されている楯はアーモンド形で、騎士の左手に握られ、また円形の楯も少数みられる。このアーモンド形の楯は十世紀末以降継続して多くの写本類に表示されており、なおタペストリーの図、アーモンド形楯は食卓の代用にも利用された。[51] 兜は、円錐の形の鉄製帽子で、鼻当をつけ、多くは鉄の薄板を継ぎ合わせたもので、十一世紀初めにその使用が普及し、タペストリーに描かれている戦士は、丘の上で戦っているイギリスの歩兵を除いて、ほとんどが着用している。また鎖帷子は、十世紀の記述には、胴よろいであり、鉄の衣であり、騎士が戦闘で敵の放った矢をはね返すとあり、タペストリーでは、イギリス、ノルマンそれぞれの騎士、歩兵合わせて約二〇〇ほどの鎖帷子が描かれているが、[52] この鎖帷子が完成するのは十四世紀で、こうした甲冑は資材は少量であっても、手間ひまのかかる手仕事であり、そのため価格は上昇した。

鎖帷子は、十二世紀の後半には鎖のついたシャツに代り、十三世紀の中頃にはさらに金属板で強化された。このような武装の技術的発展は、騎士の社会的地位を向上させ、完全武装の騎士を創出した。それにともない、騎士の武装は高価になったため、十三世紀には、それを賄える騎士の数は減少した。[53] この結果、十一世紀から十二世紀初めに、騎士の数は最大に達したのち、十三世紀には、かれらの数は減少を辿り、一方では従者の数が増加するが、当時の騎士は十一世紀の騎士よりはるかに富裕で軍事力としても有効であった。

〔注〕

(1) マルク・ブロック、新村・森岡・大西・神沢訳「封建社会」2、一九七七、五―六四ページ。J・M・ファン・ウインター、佐藤・渡部訳「騎士」、一九八二、一六―一七ページ。

(2) Brunner, H., Der Reiterdiest und die Anfänge des Lehnswesens (Zeitshrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Germ. Abt. 8, 1887, S.1−38)

(3) Mangoldt-Gaudlitz, H. von, Die Reiterei in den germanisischen und fränkischen Heeren bis zum Ausgang der deutchen Karolinger, 1922.

(4) Lot, F., Pfister, C., Ganshof, F. L., Les destinées de l'empire en Occident de 395 à 888, 1940, p. 665—88.

(5) W・ゴッフアートは重装騎士の軍隊を創設するためにマルテルが教会の土地を強奪したというのは神話であり、現実の過程はより複雑であり、政治的混乱の中で司教が統制力を失い、教会の土地の利用や管理が乱れた点を指摘している。Goffart, W., The Le Mans forgeries, 1966, p. 9—10.

(6) リン・ホワイト・Jr、内田星美訳「中世の技術と社会変動」一九八五。W・ウィットフォーゲルは、騎馬戦術の発見を第一騎馬兵革命とし、六世紀に広汎な地域に普及した鐙により弓を射ったり槍で刺突する騎馬兵の座が安定するに至った騎馬戦術の革新を第二次騎馬兵革命とよんでいる。Wittfogel, K, A., China und osteurasische Kavallerie-Revolution (Ural-altaische Jahrbücher, 49, 1977, S. 121—40)

(7) Bachrach, B. S., Charles Martel, mounted shock combat, the stirrup, and feudalism (Studies in Medieval and Renaissance History, 7, 1970, p. 47—75)

(8) Bachrach, B. S., op. cit., 51—53.

(9) Buchner, R., hrsg., Gregor von Tour・Zehn Bücher Geschichte, IV, 3. 49. VI,31. IX, 31. X,9.

(10) Beyerle, F., Buchner, R., hrsg, Lex Ribuaria (M. G. H., Leges III, ii, 40, 41)

(11) ヨイツハルドウス、ノトケルス、国原吉之助訳「カルロス大帝伝」一九八八、一四五—五二ページ。

(12) Bachrach, B.S., op. cit., p. 62, 注46.

(13) Bachrach, B. S., op. cit., p. 62, 注47,および White, J. R., op. cit. p. 149.

(14) Stein, F., Adelsgräber des Achten Jahrhunderts in Deutschland, 1967, 馬具については, S. 84—92.

(15) Bachrach, B. S., op. cit., p. 63—66.

(16) Bachrach, B. S., Merovingian military organiszation 481—751, 1972,p. 128.

(17) Janssen, W., Reiten und Fahren in der Merowinrzeit (Jahnkuhn, H., Kimmig, W., Ebel, E. hrsg., Untersuchungen zu Handel und Verkehr der vor-und frühgeschichtlichen Zeit in Mittel-und Nordeuropa, Teil V, 1989, S. 203—209)

(18) Ganshof, F. L., A propos de la cavalrie dans les armées de Charlemagne (Academie des Inscriptions et Belles-Lettres: Comptes rendus des séances, II, 1952, p. 531—37)

(19) Verbruggen, J. R., L'armée et la stratégie de Charlemagne (Beumann, H., hrsg., Karl der Grosse, Lebenswerk und Nachleben, I, 1965, S. 435)

(20) Werner, K. F., Heersorgnisation und Kriegführung im deutschen Königreich des 10. und 11. Jahrhundert (Ordinamenti Militari in Occidente nell' alto medioevo. XVa Settimana di studio del Centro Italiano di Studi sull' Alto Medioevo, Spoleto, 1968, p. 819—21)

(21) Contamine, P., La guerre au moen age, 1980, p.315—20.

(22) Bachrach, B. S., Charlemagne's cavalry: myth and

reality (Military Affairs, VLVII, 1983, p. 181−84)

(23) Hüpper-Dröge, D., Schutz-und Angriffswaffen nach den Leges und verwandten fränkischen Rechtsquellen (Schmidt-Wiegand, R., hrsg., Wörter und Sachen im Linchte der Bezeichnungsforschung, 1981, S. 107−27)

(24) Bachrach, B. S., Charlemagés cavalry, p. 181.

(25) Lyon, H., R., Percival, J., The reign of Charlmagne, 1975, p. 49−51.

(26) Lyon, H. R., Percival, J., op. cit., p. 66−67.

(27) M. G. H., Capitvlaria Regum Francorvnm, II, 273, S. 321.

(28) Davis, R. H. C., The medieval warhorse, 1989, ., p. 31−37.

(29) Janssen W., op., cit., S. 206.

(30) Davis, R. H. C., op., cit., p. 49−50.

(31) Davis, R. H. C., op., cit., p. 51.

(32) Davis, R. H. C. op. cit., p. 50.

(33) Rau, R., nrsg., Quellen zur Karolingischen Reichsgeschichte, I, S. 43−45.

(34) Bachrach, B. S., Animals and warfare in early medieval Europe (Settimane di studio del Centro Italiano di Stdudi sull' Alto Medioevo, Spoieto, XXXI, 1983, p. 730)

(35) Davis, R. H. C., op. cit., p. 13.

(36) Pohl, W., Die Awaren: Ein Steppenvolk in Mitteleuropa 567−822 N. Chr., 1988,S. 170−72.

(37) Maurice's Strategikon, Handbook of byzantine miltary strategy, Dennis, G. T. trans., 1965, p. 13, 30.

(38) Pohl, W., op. cit. S.

(39) Lindner, R. P., Normadism, horses and Huns (Past and Present, 92, 1981, p. 17)

(40) Déer, J., Karl der Grosse und der Untergang des Awarenreichs (Beumann, H., nrsg., Karl der Grosse, 1. S. 763)

(41) Nithardi historiarum, III, 6 (Rau, R., hrsg., Ausgewähit Quellen zur Deutschen Geschichte des Mittelalters, V, S. 442−43)

(42) Verbruggen, J. F., op. cit., 425. この模様敵の記述には長い槍が振り上げられ、投擲する構えがみられるが、槍の使い方には次の四つの方法がある。㈠槍投げのように投擲する。㈡猪狩りのように下の方に槍を突き刺す。㈢騎乗の戦士が馬上から敵を目がけて槍を投げ上げる。㈣槍を小脇にかかえ込んで騎馬で疾走しながら敵を刺突する。Davis, R. H. C., op. cit., p. 15.

(43) Bachrach, B. S., Animais and warfare, p. 735.

(44) Leyser, K. F., Medieval Germany and its neighbours, 900−1205, 1982, p.33.

(45) Leyser, K. F., op. cit., p. 58−63.

(46) Lindner, P., op. cit., p. 3 , p. 19.

(47) Bachrach, B S., Animals and warfare, p. 742.

(48) Bachrach, B. S., Animals, p. 744.

(49) Musset, L., La tapisserie de Bayeux, œure d'art et document historique, 1989, p. 56.

(50) Musset, L., ibid.

(51) Musset, L., op. cit., p. 52.

(52) Musset, L., op. cit., p. 50.

(53) Verbruggen, J. F., The art of warfare in western Europe during the Midul Ages, 1977, p. 28.